

大平さんの「恋人」として

佐 橋 滋

われわれの仲間は大平さんと呼ぶのに、その時々で大臣といったり、幹事長といったり、総理といったりする。敬意を表するというより親しみをこめてそういう呼び方をする。しかし、普通には「大平さん」であり、時には「おとうちゃん」と呼ぶ。大平さんは人に好かれる人であり、心の優しい人であった。

わたくしはパーティーの席などで大平さんに会うと「おお恋人よ」と声をかけられる。われわれが大平さんと月一回呑む会を持つてから久しい。その会がはねると時に雀卓を囲むことがあった。いずれも大した腕前の連中ではなかったが、なかでも大平さんは一番ひどかったと思う。ところが、こういうものかわたくしはその大平さんに引き込まれるように振りこむ。それが一度や二度ではなく、しょっちゅうだから不思議であった。わたくしの顔を見ると、「おお恋人よ」といいたくなるのも分からんではない。大蔵省のOBから、君の麻雀もおとうちゃんに負けるようでは大したことはないなどとひやかされる始末である。大平さんの麻雀は自分の手の内以外は眼中になく、もつぱら芸術品をつくるのに懸命で指先をなめなめ牌を並べ変え、ためつすがめつして楽しんでおられる。「きたない」といっても馬耳東風で一向耳に入らないらしい。しかするうちに余り上手でもない唄が始まる。きまって「勇ましく 出港用意のラッパが 響きや 何の未練も残しやせぬ みずく屍とこの身を棄てて 今ぞ乗り出す 太平洋」、リーチであるうとヤミテンであるうと唄が出たらテンパイである。そしてこの横須賀小唄が出たらそれは大きな手である。その予告つきに勝てないんだから世話はない。しかし「それだ」とい

って顔をくしゃくしゃにして牌をフロアする大平さんの無邪気な嬉しそうな顔は、なんともいえす楽しい。

大分前のことになるが、東大寺戒壇院の広目天と多聞天をみせて、似ているでしょうといったら、あんまり感心してくれなかった。それはそれとして大平さんの笑い顔は絶品であって純真と無邪気そのものである。こういう笑い顔をする人に悪人はいない。大平さんのアーウーは有名だが、われわれの会合では、明瞭率直で片言隻句如何に真面目にその問題に取り組んでおられるかがよく分かった。われわれがひやかすと聞き手の質だなあといつて笑われた。大平さんは政治家である前に人間らしい人であり、文化の分かる人であった。恐らく国民が安心して政治を任せ得る数少ない人ではなかったのか。

総裁選を争われている時に、末松謙澄の前兵児謡せんべいじうたを呈した。「勝てば是官こんざん 負くれば是賊こんぞく 男子唯応まさに 嶮難を犯すべし 咄嗟とつさ暁に 鹿兒島を出で 絶叫して夕に渡る 太郎山 眼下さとい叢爾さいじたり 熊本の城 手に唾つばして 抜くべし 立食の間 君見ずや 南関北関 路歴々 直に此の関を破らば 一敵もなからん」。政治のことは分からないが、大平さんが勝ちそうな気がして、勝ってもらいたい気持と現実には勝つことがこちゃこちゃになってしまった。

大平さんご本人は恐らく大してなりたくもなかったに違いないが、総理になられてからは不愉快なことの連続であったと思う。そして大平さんは期待された力を發揮することなく突如として昇天してしまわれた。こういう政治家は当分あらわれないであろう。「丞相じゆうしょうの祠堂 何れの処にか尋ねん 錦宮城外 柏はく 森々 階に映ずる碧草 自ずから春色 葉を隔つる黄鸝こうり 空しく好音 三顧頻しきりに煩わす 天下の計 両朝 開済す 老臣の心 師を出し未だ捷かたざるに 身先ず死し 長えに英雄をして 涙 襟に満しむ」。

杜甫の蜀相と題するこの詩を遺影の前にささげる。

(余暇開発センター理事長)